

永野地区全体会議 Aグループ 記録

- ・助け合いグループで、庭の剪定を行っている。
⇒(申込が、113件 3~4割が、剪定での利用)
ご両親が亡くなり、男性が一人暮らしに。(男性、精神障害あり)
「庭の剪定、手伝い」を提案。切った枝を袋に入れる作業など問題無く可能。
剪定の日、一度も休む事なし(無欠勤)
- ・「生活介護事業所 おもろ」を紹介してもらった。(2人からの情報)
美晴台公園の掃除にて、協力を検討。
作業としては、切った枝や木を袋へ入れる作業。出来そうではないか・・・?
- ・障がいの方、地域で居ると聞いても、詳細が分からないのが現状。
(何処に、誰が住んでいるか等)。

~参加者全員より~
- ・「障がい」という言葉自体、区別し過ぎ。
⇒「障がい」と「健常者」と、区別する必要ない。
- ・「障がい」といっても、ひとくくりではない。
障がいの種類も、「身体的」、「精神的」と、さまざま。
- ・健常者でも、各々、何かしらの「こだわり」もある。
障がいのある方は、「こだわり」が、より強く表面等に出ていると
考えるのも一つではないか?
- ・「私たちからの声掛けが、必要」ではないか?

永野地区全体会議 Bグループ 記録

- 福祉クラブで介護タクシーの運転ボランティアをしている。障害者や高齢者に接する機会があるので自分は障害に理解があるが、一般の人は違う。介護タクシーでは障害児者の保護者から「ありがとう」と感謝される。保護者が大変。保護者に何か出来る事があるだろうか考える。
- 町内会の中に5つ施設がある。町内で障害を持っている人がいて、道で声をかけると返事がある時とない時がある。日によって状態が変わるのだと思う。
- 障害者に関わったことがないので今日の話は新鮮だった。
- 地域にある障害者グループホームの成り立ちを知らなかったので確認したら、障害の子を持つ親が土地と建物を提供して出来た施設と分かった。入所者との交流はしているが、住民皆知っている訳ではない。町内会として何が出来るか。
- 臨床検査技師として働いている。大きな障害者施設には検診で行くことがあり知っていたが、住宅地の中に小さい施設があるのは知らなかった。
- 「共生社会」は大きなテーマ。障害と言っても様々で幅広い。どう進めていったらよいか。まずは理解すること、状況を把握することが大事。それにより対応変わってくる。町内会館でのサロンに車いすで来る方がいるが段差があり車いすを持ち上げる必要がある。スロープを付けてバリアフリー化する予定。
- 先日の雪、チャレンジフィールドのメンバーが雪かきをしてくれた。今度、町内のバーベキューに呼んであげようかと考えている。
- あおぞらホーム、町内会に加入しているので夏祭りや高齢者向けの作品展にはお誘いしている。夏祭りは5,6人が参加した。
- 地域の中にある小規模な施設、隣の人は分かっているけど、同じ町内でも端の人は施設があること知らない。グループホームで暮らす障害者の方々が町内会館に花を持ってきてくれたり、掃除にも来てくれたりしている。町内会の広報紙に載せて紹介・周知したい。
- 当事者に数多く接しないとわからない。自分は他区でボランティアとして障害者に接している。親御さんが大変。
- 障害のある人が地域のイベントに来てくれている。ただ、お菓子をもらう為に皆が並んでいるのに並ばず先頭に来て貰おうとする。先に渡す対応をしているが、並んでいる子供達からは「何で？」と聞かれる。「事情があって急いでいる」と伝えている。
- 今のところ地域にも職場にも、身近なところに障害者はいない。でも、近くにいた場合は理解してその人がやりやすいようにしてあげたい。
- 大きい施設は重度の方が入っているが、今回、障害者が地域の普通の家で生活していることに驚いた。
- 施設には年配の人が入っていると思っていたので、今回話してくれたような若くて働いている人で、しかも収入を得ていることに驚いた。
- 18歳になるとそれまで受けていた支援が乏しくなるとテレビで見たことがある。
- 障害作業所の製品を自治会で購入して活用(例:お祭りの景品等)することも支援。直接的ではなく間接的な支援も大事。
- 災害時の協力の意識づけ、大切。

永野地区全体会議（グループ 記録

①今回の発表を受けてどうだったか

- ・施設はたくさんあるが、どのような内容か、支援をしているのか棲み分けがわからない
- ・いずみプラザの中にチャレンジフィールドがある。雪のときに率先して4～5名で雪かきを行っていた。話を聞いて色々な方がいると思った。大学卒業しても症状が出たりすることもあるのだと思った。

当事者の話を聞いていても健常者と同じと思った。

- ・住んでいる近くに高齢者の施設があるが自分が挨拶すると挨拶してくれる。顔見知りになれば気になることはない

- ・住民からの反対の声があっても賛成に変わった。理解はしていてもいざ自分の自治会に施設ができるとなると反対の声が出てきてしまう。忍耐強く話すことが大事であると思った。このような体制があるからこそ上永谷に施設が多いのではと思った。

- ・施設を設立することは賛成の人が多いけど、反対の声が強烈。
- ・自分のところは施設設立が断念してしまったが、「なぜこの場所なの？」という声が多かった。
- ・このような施設を作る難しさを改めて感じた。何年もかかることだと思う。
- ・何をやるにもやり方が大事。相手を知らないといけない、ちゃんと話していくことが大事。
- ・トラブルも話し合うことで解決。
- ・ドエル建設前に「なぜこの場所に」というところの説明がなかったのでは。
- ・現在は理事長が適宜説明してくれている
- ・話し合いでじっくりやるのがいいではないかと思った。
- ・ドエルさんができてから、今日話しを聞くまですっかりドエルさんのことは忘れていたが、そのくらい地域に馴染んで生活しているのではないか

②自治会・町内会役員以外の方たちへ障がいという心のハードルを下げるにはどんなことができそうか

- ・情報をまず提供する（事前に施設ができることなど）その事を聞いたうえで考えてもらえるのでは

- ・上永谷緑地のあたりを障がい者の方が掃除しているのはよく見かけるので一緒に行えたらいいのではないか。
- ・上永谷のヨーカドーの前でも障がい者のかたが掃除しているのはよく見かける。
- ・自治会となにか行事を一緒に行うといいのではないか。

永野地区全体会議 Dグループ 記録

●ドエルはなぶさや高橋会長の発表についての感想・意見

- ・障がい者に接する機会が少ない地域だと同じように反対運動が起きてしまうと思う。
- ・南高台町内会にも2つのグループホームがあり、地域で行っている行事等に参加していただいている。トラブル等も特になく、よい関係が構築出来ている。
- ・障がい者施設と言っても色々な施設があり、どんな方がいるのか、どんな方が対象になっているのかが分からない。
- ・見方を変えれば、新しく戸建や集合住宅が建つよりも障がい者施設等が新しく開所するのが、誰が入ってくるのか分かるから安心できるのではないかな。
- ・病状や状態を知らないから反対意見が出てしまう。理解するために関わりを持ったのがいい。
- ・前向きな姿勢が大事。知らないことを理解しようとする必要がある。
- ・施設側が地域のことを避けているように感じる。もっと地域に出てきてほしい。
- ・街中で症状が出てパニックになっていても対応の仕方が分からないから声をかけられない。対処方法や関わり方を教えてくれるような機会を作ってほしい。
- ・自分もいつどうなるかわからない。偏見をなくしていきたい。そして地域にいる仲間のため、共存していきたい。

●障がい者の方と接することは、あるか？

- ・上永谷町内会では、防災訓練や地域行事があればお呼びをしている。
- ・南高台でも地域行事に参加していただいている。
- ・いずみプラザでは、雪かきや草むしりをチャレンジフィールドの方がやられていた。
→自治会や地域の方も一緒になってやれたらいい。

●障がい者の方とのコミュニケーションや手助けをするための一歩を踏み出すには？

- ・声をかけるのには、勇気がいる。ハードルがかなり高い。
→声をかけても手伝いはいらぬと言われることが多く、どんどん声をかけにくくなっていく。
- ・近所であれば挨拶をすることはできるが、それ以上の話が出来ない。何をしゃべっていいかわからないため。
- ・白杖を持っている方でバスの段差があるときに声をかけた。明らかに困っている様子や異常事態が分かれば声をかけて助けることはできる。
→心配だと思ったら何かあったときに助けられるように見守るようにしている。見守ることも大切だと思う。なんでも助ければ良いというものでもないかもしれない。
- ・放課後デイで働いているため普段から関わることはあるが、無理やり助けることはしない。困っているようであれば、困りごとを聞き助けが必要と言えれば助けるようにしている。すぐに助けてしまうと困りごとを言えないようになってしまう。また親切心で助けても逆効果の場合があるのではないかな。
- ・関われる場をもっと増やしていけば理解が深まるのではないかな。

●その他(ドエルはなぶささん情報)

- ・住民への要望があるか伺った際に、特にないとのことだった。
- ・災害時に自宅が危険になった際には、一時避難場所に使用していいと言われた。心強い存在になっている。
- ・いつでも見学に来てほしいとの話もあった。

永野地区全体会議 Eグループ 記録

<お話を聞いた感想>

- ・軽い障害の方の理解はある程度できたと思うが、重い障害のある方を地域でどのように受け入れれば良いかまだ想像できない
- ・施設建設時の経緯が聞けて良かった
- ・子育て世代として障害者に関して知識がないと心配してしまう気持ちはわかるが、今日のような話を聞くことができれば反対にはつながらないのではないか
- ・利用者の方が来てくれて直接話を聞いたことが嬉しかった
- ・施設利用者の方が町内会等の行事に参加してくれることで、接する機会が増えて障害者に対する理解が進んだと思う
- ・施設が近くにできることについて総論的には賛成したいが、自分事になるとなかなか賛成できない気持ちもわかる。そういった気持ちの方も多いと思うが、地域でしっかり合意形成できたのはすごいことだと思う

<地元で施設ができる計画を聞いたらどう思うか>

- ・自身の子供が障害者だった場合にそういった施設があることは救いになる
- ・子育て世代が自身の子供を心配するのは当然のことではないか
- ・施設として管理が行き届いていることがわかれば心配がへるのではないか
- ・運営する法人を知ることが理解につながるので、法人としての実績なども知りたい
初めて施設を建設する法人だと実績がないので不利かもしれない
- ・施設が必要とされるのは理解しているつもりだが、自身の近くにくるとなかなか難しい
- ・最近実際に施設の建設を反対する声があって断念した事例がある
⇒どういった意見が出たのか
通所施設の場合には利用者が通るルートを示すべきという意見があった
施設の重要性はわかるが、なぜここなのかという意見があった
- ・幼少期に精神疾患の方に追いかけられた経験がある
- ・電車の中でも大きな声を出している方がいると怖いという気持ちはある
⇒自分の子供が大丈夫か心配になる
- ・重度障害の方を受け入れる施設は少ないという現状は理解している

<施設建設に対する理解が進むために自治会長会としてできること>

- ・今日聞いた話をもっと広めていく必要がある
- ・施設ができるメリットを示していく（周囲の道路が明るくなるなど）
- ・町内会が積極的に賛成するというスタンスをとることは難しいと思う
- ・イベントを企画するときに障害者施設の方に出店してもらう
- ・夏祭りに施設の方が気軽にこられるように席を用意している

<全体を振り返って>

- ・施設の方から直接話を聞いて貴重な機会になった
- ・特に利用者の方がこういった場に来てくれたことに感謝したい
- ・いつどういう障害になるかわからないことがわかった
- ・地域と施設の信頼関係の構築が必要不可欠だが、そこには時間がかかると改めて認識した
- ・障害のある方と直接接することが理解を進めるためにもっとも大事だと感じた
- ・幼少期から障害者に関する理解を深める教育が必要になっている

永野地区全体会議 F グループ 記録

- ・グループホーム建設の経過を詳しく伺いたかった。自分の町内会で同様の話が持ち上がった時に参考にしたく宝のような経験だ。障害者の知識や知見に乏しいなかで、説明と理解は互いにしんどいものである。知らしめて行く機会を持ちたい。
- ・服薬コントロールを自分でできるのは軽度な方でもっと手間暇かかる方がいるだろう。本人の名前をイニシャルで伏せたのは失礼で却って共生になっていない印象を受けた。
- ・地元で建設申請があったが賛同得られず施設側から断られた。総論は賛成でも「ここじゃなければ」という自宅から遠くだったら構わないというもの。児童相談所（以下 児相）には反対なかったが予定地の土木事務所跡地が離れているからだろう。広く考えてほしい。
- ・児相と火葬場は違うものの、説明会遅れたら不信感にもなるが行政でここと決まったら諦めようとなる。自分の得にならなくとも間に入る人がいないと難しい。不都合ではなく社会の一員の自覚の問題だろう。
- ・除夜の鐘さえつくなという声もあるというし、丸山台公園の祭りもその期間避難される近隣宅もある。色々行き過ぎている印象だ。
- ・ボランティアが公園掃除しているときに、子連れの親が「いつまで掃除しているんだ」と言ってきたと。
- ・児相も（児童福祉施設と異なり）長期収容ではない。先ほども他の施設を見に行っただけで目からうろこであったという。学ぼうとしていかねば。
- ・建てる側の説明は時間をかけねばならない。ゴールありきではまとまりづらい。早めに情報が必要。認可は不要でも住民が反対だと建てられない。
- ・自分の町内会の施設は前々から説明会ある旨周知され、質問にも答えていただいた。今では町内会の賛助会員で関係も良好だ。
- ・あいつらは役に立たないと極論を言う人もいるが、グループホームは社会性をつくってあげるところだと思っている。教えることも仕事だしやり方も伝えねば。
- ・配布資料の施設リストにある各施設の説明会や行き来など、他の自治会でどうしているのか知りたい。
- ・思いはあるが約 2,000 世帯、端から端まで歩くのに何十分もかかる大所帯と広さが悩ましい。
- ・賛成と反対、それぞれ普段の近隣の関係性が反映されるように思う。

(以上)

永野地区全体会議 Gグループ 記録

<感想>

- ・説明会では、こどもの通学路にあたることから母親たちの意見が多かった。段取りが悪くもう少し上手く進めた方がいいと感じた。そこに高橋会長が入り上手く進めていた。高齢も含めて、こうした福祉施設はできていく。共生社会のため仲良くできるといい。
- ・以前に高齢者のグループホームが建った。グループホームがどういうものかも分からない。知らないことによる不安が大きいのではないか。高齢のグループホームの際も、通学路であることから、工事車両の大きさや台数、交通量などの要望が出た。はじめは、何故ここに施設を作るのかといった声もあった。結局、理解されできあがり、地域の中で一緒にやっている。いずれはお世話になるかもしれない。

<グループホームが建ってからの不安は？>

- ・知らない人にとっては、不安しかなかった。身体障害なら分かるが、精神障害は外から見えない障害なので分からない。地域にもいるはずだが、知られていない。障害はいろいろあり、知られていない。
- ・家の近くに特に説明会もなく知らないうちに障害者のグループホームが建った。両親が亡くなったダウン症の方を祖父がみていたが、土地を提供しグループホームを立ててもらった。特にトラブルもなく、毎日ポスティングで家の前を通っている。
- ・総論賛成だが、各論は反対の人が多。早い段階で地域に説明があれば良かった。
- ・このグループホームは良い例。町内会に向けて説明してくれた。
- ・このグループホームは町内会に入ってくれている。他のグループホームも町内会に入ってくれている。

<障害のある方との関わりや行事への参加について>

- ・母が亡くなり、父と二人暮らしになった障害のある方。このところ本人の部屋の電気が点かず。民生委員が訪問したら入院していたことが分かった。このように、近所の人が見守ってくれている。相談をケアプラザに繋ぐこともある。
- ・区内 7 校の支援学級の発表会があった。素晴らしい発表会だったが、普通が大事だと思った。親は認めたがらないが、どの段階までこの学校にいるのかと思った。支援学級のサポートに入っているが、自立できる人になるにはどうすればいいのか考える。
- ・クラスの子はみんな、障害のある子に対してやさしい。自分は支援学級にサポートに行く中で自然と対応に詳しくなった。工夫しながら接している。実際に関わることで理解が進む。
- ・ドエルはなぶさは、町内会の行事に団体で来てくれる。防災訓練にも来てくれる。夏祭りにも来てくれる。そうした関わりが大切だと思う。

永野地区全体会議 Hグループ 記録

<事例発表を受けて>

- ・精神科のグループホーム設置について。どんな方が利用するのか。なぜ、法的根拠のない住民説明会をするのか。
→それなりに日常生活を送ることはできるが、一人では生活できず誰かの支援が必要な人が共同生活する場所。他の利用者であったり支援者だったりに生活を助けてもらう。生活の場なので落ち着いて暮らせる環境が必要。特に精神疾患の方は精神状態が崩れやすいため配慮が必要。地域の理解がないと難しい。

<障害者施設設置にあたっての地域住民の理解について>

- ・地域全体で考えれば受け入れるスタンスだが、隣近所の方が反対しがち。
- ・必要性などいくら説明しても受け入れないという方は一定数いる。
- ・強い偏見を持つ人もいる。聞く耳を持たない人はどうしようもない。
- ・地価が下がるから嫌という人もいる。
- ・文句を言うのは障害に対する理解が不足している人。
- ・障害のある人の駅や電車での独り言、起こした事件など、一部の人のことを障害者全部に当てはめて認識する人がいる。
- ・マンションの1階の空きスペースに新たに施設が立ち上がる時、マンションの管理組合から法人に説明を求めた。話合いの中で駐車の手配や移動時に引率者をつけるなど色々とルールを提案し法人に受け入れてもらった。住民には管理組合の代表者から決定事項を伝えた。今のところ大きな問題はない。
- ・組合など窓口となるところがあれば話は早いがないと難しい。
- ・自治会町内会がうまく法人と地域の妥協点に持っていけるように調整できるといいが、短期間で調整するとなると難しい。法人側が早い段階で説明の機会を設けてくれるとよい。
- ・自治会と地域住民の関係性が崩れるのはよくない。そのため、反対意見がある時に法人側に立つというのは難しい。中立的で一步引いた位置からの関わりになる。
- ・偏見で反対などという人が出ないよう障害理解の風土が醸成されているとよい。
- ・もし自分が家族ならという風に考えられるとよい。
- ・利用している人のことがわかれば反対しないと思う。自分と違う人は怖い。
- ・施設が完成してしまっただけでその様子を実際に見ることができれば偏見は少なくなると思う。ただ、できるまではどうしようもない。
- ・対応が分からないから何か言われたらどうしようと思ってしまい避けるようになる。
- ・正しい接し方をみんながわかるとよい。
- ・支援学級の子どもについて、同じ年代の子どもが「バカ学級」と言っていた。どうやらその子の親がそのようなことを言っているらしい。実際に子どもに支援学級の様子を見学させ、支援学級の子ができていっていることを見せたところ、子どもの偏見がなくなった。
- ・一般の人でも変わった人はいるし、完全な人はいない。障害があることを個性として捉えられる

といい。

- ・障害のある人を支える地域づくりが重要。
- ・昔は障害のある人を人の目に届かないようにする傾向があった。最近は、オープンにして助けてという人が増えてきた印象。
→オープンにする人とそうでない人で5分5分ぐらいの印象。オープンにする側に傾いてきている。

<災害時要援護者について>

能登半島の地震もあった。障害のある人の災害時にフォローも課題だと思う。

- ・要援護者名簿作成時に、助けてほしいと回答する人は一定数いるが、助けられると回答する人は少ない。
- ・災害時の支援に限らず担い手は減っている。
- ・子どもが下校中に地震にあい、怖くてその場にあったブロック塀によりかかり動けなくなったということがあった。その時は何もなかったがブロック塀が倒れたりするようだと危険。そういった時に近所の人が声をかけて助けてくれるとよい。こんなことがあったから助けてあげてほしいといったエピソードはあまり地域に伝わっていない。
- ・助けられると回答しなかった人は、何をすればいいのかわからない、やるといったらなんでもやらされそうという風に思ったのかもしれない。こういった助けが必要ということが具体的にっていると手上げしやすいかもしれない。

永野地区全体会議 I グループ 記録

●それぞれ所属の自治町内会の様子

- ・人数が少ない町会。町内会長がマメなので、全部把握している。民生委員も良く回っている。特に問題なし。
- ・役員になって、年月が浅い。全体会に参加した。
町内会人数、2000人、役員100人。役員募集に四苦八苦している。
HPで役員を募集している。町内会の行事は、5回/年くらい。
- ・町会には、600世帯/700世帯中、加入。自治会役員は新人が多いが、ボランティアは多く長く続けている。
(助け合いグループ、夏祭りグループ、防犯見守りグループ等)
- ・シルバークラブ、70名加入。役員の任期は一年。目の不自由な方も参加している。

●本日の講演会を聴いてみて

- ・まちが違うと思った。若い人たちが動いていて活気があって良いことだ。
- ・障がい者施設を作ることがどれだけ大変かよくわかった。
地鎮祭をやったあと、3,40代の方が住民説明会に町内会館に、あふれる人が集まって来るとは大変な状態だと思った。地域にとっては重要なことなんだと思った。障がい者理解が必要。
- ・精神の施設に対する偏見があるんだ、と思った。
- ・熱を出したり、足を骨折したりと精神の病も同じなのと思った。
- ・どう接したらよいか疑問。
- ・自分がビクビクしていると相手に伝わってしまう。勉強していきたい。
- ・直接いくよりも、中に入ってきてもらった方がいい。
(こちらが出向くより、こちら側に入ってきてもらう)
- ・地域に大企業が老人施設を作ろうととして、住民が大反対して署名を集めた。悲しくなった。
今では、施設は建設され、運営されている。
- ・町内に施設は4か所あるが反対がおこることもなく、自然な様子。
- ・仕事で障がいの子も達と接したことがある。良いことは良い。悪いことは悪い。と接する側のブレない姿勢が大事。支援者側も皆、同じブレない姿勢で対応、情報交換して共有していた。
自分の子どもに接する時と一緒にすること。悪いことは悪いと律したあとは、抱きしめる寄り添うフォローが大事。相手からの答えを急いではいだめ。待つことが大事。
- ・テンションが上がり、こだわりが出ることもある。症状をお薬で押さえていることもある。
東日本大震災の際に帰宅できなかった子どもを預かる機会があったが、最初は預かれることに抵抗はなかったがお薬を持参してなく、お薬がないからダメと落ち着かなくなってしまった。
そのようなこともある。
- ・障がい者に対して、かわいそうだと思っでは、ダメ。同じ目線で見るとその人そのままをみる。必要だったら手助け。
- ・防災の場に出てきてもらう→減災にもなる。